

ニッポン ドクター和の 臨終区巻



平安時代の日本人の寿命は男性が33歳、女性が27歳くらいでした。その後、平均寿命は文明の進化とともに延びていきましたが50歳を超えたのは、戦後、1947年になってからのこと。高度成長期を経て男女共に80歳を超えたのは、2015年のことです。

われわれは今、医療や栄養、そして平和に恵まれて、1000年前の人の3倍近くも生きられるようになりました。

長生きだからこそ、人生をどこかで区切り、引き際を自分で決める場面がやってきます。だけれどこれがなかなか、さまざまシガラミや執着が生まれて、一筋縄ではいかないでしょう。その点、この人の引き際は、実に見事であったと記憶しています。

関西のレジェンドともいわれたタレントの上岡龍太郎さんが、芸能界を去ったのはデビュー40周年

308

元タレント 上岡龍太郎



憧れる引き際の美学

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長。1995年に尼崎市で開業した長尾クリニックを65歳になる6月末で卒業。今後新たな形で医療に携わっていく。24日には神戸で「卒業ライブ」を挙行。詳しくは長尾和宏オフィシャルサイトにて。

こそ、第二の人生はより芳醇(ほうじゆん)なものであったと想像します。そして今年5月19日に大阪市内の病院で亡くなりました。享年81。死因は、肺がんと間質性肺炎との発表。死因が2つです。肺は、「肺胞」という小さな風船のような組織が集まってできています。この肺胞の壁を「間質」といい、壁に炎症が起きて線維化し、酸素がうまく取り込めなくなる状態が間質性肺炎です。この病気の人は、肺がんを発症しやすいことがわかっています。さらに悩ましいのは、手術や放射線、抗がん剤などの肺がんの治療が間質性肺炎を悪化させてしまうリスクがある。通常の肺がんよりも慎重な医療処置が求められることです。

突然決めたわけではなく、その数年前から「ボクの芸は20世紀で終わり。21世紀は新しい人生を歩みたい」と引退を決意されていた

「老いさらばえた姿を見せたくない」と周囲に語ってましたよ。この時、上岡さんはまだ58歳。若くして決断できたから

「とにかく矛盾の塊のような人でした。父と子なんてそんなものかも知れませんが、本心をうかがい知ることが死ぬまでついに叶わなかったような気がします。弱みを見せず格好つけて口先三寸...。運と縁に恵まれて勝ち逃げできた幸せな人生だったと思います」

この息子さんの言葉を聞き、大いに共感してしまいました。僕も、今月末に65歳になるのを機に長尾クリニックを引退します。町医者からフリーテン医者へと姿を変え第二の人生を歩みます。だから今憧れるのは、上岡的引き際の美学。椿のように散りたいものです。